

部会	番号	事業名	テーマ名	評価段階	担当部	開始	終了	所内総合評価	外部総合評価平均	委員	コメント（原文）
生産技術部会	1	公設試共同研究推進事業	アクティブセンシングによる非破壊検査システムの開発			H11	H14	3	3.4	A委員	マイクロ波による水分測定、必要性、目標とも4年のどうして実用化にならないのか。折角の開発が活きるように用途を探すべき。SQUIDはアイデアものなので、岩大に期待。
										B委員	製品化、事業化へのエネルギーは開発に要したエネルギーの何倍も要することが一般的です。企業との共同開発やマーケティングを効果的に行って、実用化が実現されることを期待します。
										C委員	これからますます必要とされる技術だと思えます。若手大学だけでなく、センターとしても民間企業にもっと強く働きかけ実用化を目指してほしいと思えます。
										D委員	・レーザースクイド顕微鏡には高度な技術の応用であり、低価格化と信頼性向上を課題として、より実機に近いプロトタイプの開発が求められる。
										E委員	取り扱いの簡単な安価な測定器が出来る事を期待する。材料の水分量を正確に測定できると良い。
										F委員	レーザー-SQUID顕微鏡の考案・開発は、非接触評価方法に寄与する有効な装置であると考えます。しかしながら、現状ではようやく研究の途についた段階であり、評価装置としての有用性をさらにつめていただきたいと思います。水分量を同定するマイクロ波の利用も、多くの利用分野が考えられるはずで、発信周波数帯域を逐次変化させてゆくなどの方策も合わせて検討していただきたいと思います。今回は事後評価ということですが、当初の目的に照らして一応の成果をあげていると判断いたします。しかしながら、ニーズをにらんだシステム開発という点では数々の問題点が山積しており、今後課題を残した段階に留まっていると判断いたします。
										G委員	決算額も大きく、基本特許を取得できたことで、研究の「妥当性」は高く、評価できそうに思える。特許使用許諾の申し込みがあったのかどうか、コメントイクラが県の需要に基づくのか、技術との適合性が高いためのかといった興味深い点を質問しそびれたのが残念である。実用化という「効果」は未知数だが可能性を高く評価したい。
	2	特定産業集積活性化関連機関支援事業	超精密加工技術の開発			H11	H14	3	2.9	A委員	折角の開発技術が活きるように、成果普及を続けていくべき。
										B委員	新規に取り組もうとする企業へ指導するために必要な基盤技術を確立するという意味では妥当性を認めますが、今後具体的に企業の困りごとに対応していくのが課題と考えます。
										C委員	ものづくりの現場にもっと内容が届くと効果が出てくると思われま。
										D委員	一般機械のオプションとしてこれらの超精密加工ができるよう（汎用）にする必要がある。
										E委員	-
										F委員	研削加工・切削加工・放電加工を対象とした精密加工技術の開発ではありますが、掲げた目標を達成したものと達成できなかったものがあるようです。問題は達成できなかった原因がどこにあるのかを特定できているか否かにあると考えます。特定できていけば、次につなげる意味でも、厳しい評価を下さなくてもよいのではないかと考えます。鏡面加工は、加工条件と共に、材料の微細構造とも密接に関連していますので、今後は、材料技術部との連携を密にして、目標達成に努めていただきたいと思います（超精密加工に適した材料開発ということも考えられるのではないのでしょうか）。また、評価項目をRy値のみで評価なされていますが、実際の応用を考えた場合、このパラメータだけで十分なのでしょうか。さらなる検討をお願いいたします。
										G委員	研究の主眼は「工程短縮」だといふこの研究を、費用対効果の観点を加味しても、高く評価することは困難を覚える。
	3	公設試共同研究推進事業	次世代クリエイティブソリューションシステムの開発			H12	H14	4	3.4	A委員	靴製造にはこんな精度は要らないので、もっと他の用途を探すべき。
										B委員	実用化されつつあることについては評価します。あとは本事業の「はきやすさ感」というコンセプトをどのようにしてお客様に納得していただいて差別化するかが今後の課題と考えます。
										C委員	今後、幅広い分野にも適用できる様に対応したいと思います。
										D委員	3次元スキャナー装置を応用した別なシステムの開発の方が有望であると考え（金型、下着など）
										E委員	精度がとても良いそうなので金型など他の分野でも応用してほしい。将来的には3次元動作の解析が出来る様になってほしい。
										F委員	メッシュ・ネットを用いた3次元形状測定は、非常に有効なツールであると考えます。8台のデジタルカメラでスキャンする方法も台数を減らすことができれば、この測定装置だけで商品化の途も開けると考えます。しかしながら、今回提示された「はきやすい靴」への応用という発想は、大いに疑問を感じます。なぜなら、静止している足型形状をいくら精密に測定しても、実際に歩いている状態を測定できない限り「はきやすい」という評価にはつながらないと判断するからであります（現状の評価手法すべてがこの点で挫折しています）。また、3次元CADでモデル化した足型を基にして紙で展開図を作りこれを組み立てるとのことですが、この段階で折角の測定精度が大きく損なわれてしまっています。実際に制作した靴をはいて「はきやすさ」を官能評価し、不具合な箇所がどの測定点とどのように対応しているのかを明らかにして、そのための改善策を盛り込んでおかない限り、オーダーメイド靴作りシステムは失敗に終わると考えます。本システムはもっと違う用途を模索する必要があるのではないのでしょうか。衣服への応用というお話もありましたが、これも観点がずれていると考えます。いくらすばらしい技術であっても、その技術内容が的確かつ有効に利用されない限り意味をなしません。技術開発はそれ自体が「目的」ではなく、あくまでも何かを達成するための「手段」であるはずで。
										G委員	この開発全体にはミッシング・リンク（失われた環）の危険性を感じる。計測精度の高さと応用対象の不整合はないのか。その精度は「ペーパークラフト材」試作品や皮革では実現できないのではないのか。よい靴は足の形だけでは成立せず、「フィッティング」と「デザイン」が重要である。事後評価としては実製品とユーザー調査なくして適切には行えない。「経済効果」に不安を抱く理由である。

部会	番号	事業名	テーマ名	評価段階	担当部	開始	終了	所内総合評価	外部総合評価平均	委員	コメント（原文）	
11月 6日(水)	4	公設試共同研究推進事業	工具摩耗自動補正機能を持つオープンCNCシステムの開発	事後	電機	H12	H14	2	2.1	A委員	専門家によると、元々無理な開発だったということか。研究開発の実状は失敗の方がはるかに多いはずであるから、シュリンクしないで今後とも挑戦的な開発をやられるように。	
										B委員	今回成された技術開発要素を整理して技術ノウハウとして次のテーマに活かされることを希望します。	
										C委員	成果予測で工具費節約等を期待しているが、このシステムでは節約等に結び付く事ではないと思います。このテーマはすでに工作機械メーカーでもっと進んだ技術を開発しており、時代に合わなくなっていると思います。	
										D委員	実用化プロジェクトであるので、実用、すなわちマーケットに近い技術開発が必要である。	
										E委員	今後、この内容を活かして行ってほしい。	
										F委員	実用化という観点からすると、工具摩耗の三次元計測・自動工具交換システム・加工精度共に目標値を100%達成できておらず、この点で厳しい所内評価が下されるのはやむを得ないと考えます。原因を特定して次につなげる努力を望みます。お話を伺っていて疑問が生じました。このような研究テーマをセンターで行う意義はどこにあるのでしょうか。この種の内容は、工作機械メーカーが生き残りをかけて精力的に取り組んでいるテーマであって、センターとしての差別化はどこにあるのでしょうか。当然のことながら、目標値を達成できなかった原因が特定できているはずですので、その点を徹底追究し、将来につなげるテーマを模索していただきたいと考えます。	
	G委員	他の委員が指摘していたことだが、自動計測の対象は「製品」であって工具ではあり得ないだろう。無人加工を目的としながら自動補正ができないのでは、「効果・妥当性」を問えない。7680万円という総費用と結果に対しては事前評価の重要性を改めて感じさせられる。										
	5	ネットワーク型磁気活用研究拠点形成推進事業	SQUID応用計測システムの開発				H14	H14	3	3.3	A委員	アイデアのある研究。岩手大での研究に期待する。
											B委員	現時点では競合する方法は無いとのことですので原理的な優位性は評価します。しかし、製造プロセスで実用化されるシステムに育てるためには、まだまだ多くの技術課題の解決が必要と思われます。
											C委員	研究テーマ1と同じ。
											D委員	研究テーマと重複しているということで、どう区別したらよいの不明。技術的には高いので、県外、世界の計測器メーカーへの売り込みがカギと考える。
											E委員	早い商品化を望む。
											F委員	ニーズとシーズをにらみ、新たな計測システムを開発しようとする姿勢は高く評価することができます。このことが、3次元計測の実現・分解能の向上・計測時間の短縮といった、実用化に向けての課題抽出につながっていると思います。現時点ではレーザー照射を一方からのみしか行っていませんが、今後は照射方向やSQUID素子自体を検討することにより（新しい高温超伝導体の採用等）、課題克服への途が開けるのではないかと考えます。岩手大学工学部との連携を強化して、研究のさらなる継続を望みます。
	G委員	研究者の職場異動は決してマイナスな現象ではないため、発表の折にはそのことを明らかにすべきであり、今後そうした事態が発生した場合の研究体制についてセンターとしての「アカウンタビリティ」（説明責任）を明確にしておくべき事例だと考える。										
	6	木質バイオマス燃焼機器開発普及事業	木質バイオマスストーブの開発				H13	H14	4	3.9	A委員	短期的にうまくまとめられた点を評価。小学校などでの利用はいつでしょう（一般家庭では？）
											B委員	実用化に向けて具体的に進んでいることは評価できます。今後は、ユーザーにとっての利便性やメリットをもっと前面に出してお客様の納得を得る戦略が重要と考えます。
											C委員	ここまで実用化できた事に高く評価致します。
											D委員	2年間で世界初のFFベレットストーブの製品化成功、地場の産物の利用、日本全国への報道、県知事とのお披露目セレモニー等、岩手発の大きな波を作ったプロジェクトであると評価する。低予算でここまで出来たことも評価。
E委員											木質バイオマスストーブが普及してきた場合、燃焼灰が大量に出てくると思う。対策を考えておく必要がある。	
F委員											所内プロジェクトの成果であるだけに、完成度の高い製品に仕上がっていると考えます。この製品が今後さらに普及していくためには、灯油より割高となる燃料コストを如何に下げられるかといった点にあると考えます。環境意識を鼓舞した製品の数々が当初の目的に反して打開策を切り開けないでいる点は、まさに手間暇の軽減とコストメリットにあるといっても過言ではありません。「意識」は理解できても「行動」に移せないという全体的な風潮が、このことを如実に物語っています。もう一点は、デザインにあります。このストーブの特色は、薪が燃えるような「揺れ動く炎の燃焼形態」にあります。しかしながら、この炎が揺れ動くさまを的確にみせるデザインがなされていません。揺れ動く炎は人間にほのぼのとした暖かさや「癒しの効果」を与えます。このような特色（独自性）を犠牲にして、既存製品形態とさほど変わらないデザインを行ったことは、極めて不適切といわざるを得ません。南部鉄器の採用もいまま歩という感否めません。南部鉄器が有する伝統的かつ普遍的なイメージと「癒しの炎」を一体化すれば、すばらしい製品に仕上がるはずで。真に「岩手型ストーブ」を標榜するからには、産地の特色を前面に打ち出した思い切ったデザインが必要です。県民が「愛着」を持って大切に育てあげていくためには、例えば、コンベを開催してデザイン案を採用するくらいの施策が必要ではないでしょうか。少ないモニターだけではこの製品の良さは伝わらないと考えます。愛着のわくものづくりがものを大切にすることを育み、このことがひいては環境問題にもつながることを理解して、大切に育てて行っていただきたいと考えます。	
G委員	岩手県らしい技術内容を製品化に結びつけたことを高く評価する。この技術を「社会システムデザイン」として確立すべく、センターとしてのサポートを期待する。製品デザインには別の解答もあっただろうが（素材、灰処理）、個人的にはアラジンのブルーフレーム及びジャパン・ブルーを連想させる本体の色彩選択を好ましいと感じている。											

部会	番号	事業名	テーマ名	評価段階	担当部	開始	終了	所内総合評価	外部総合評価平均	委員	コメント（原文）
生産技術部会 11月 6日(水)	7	新方式木質チップボイラー開発事業	新方式木質チップボイラーの開発	中間	電機	H15	H16	3	3.3	A委員	燃焼はまだしも手軽にできる木材の利用法で確実性はあるが、工技セが助けてやらないとできないことがあるうか。木、チップの機能を利用し、付加価値をつける開発はできないか。
										B委員	事業化に向けた具体的な工程表が検討されていることは評価します。あとは、効果的なマーケティングが重要と考えます。
										C委員	取り灰の対応とか、火災についての安全性等基本的な研究を強めてほしいと思います。
										D委員	チップサイロも含めて低コスト、小型化、全自動化が望まれる。
										E委員	木質チップボイラーが普及してきた時、燃焼灰の処理をどうするか、対策を考えておく必要があると思う。
										F委員	低コスト・高含水率・形状不均一等の特性を有する生チップを、環境対応型ボイラーの燃料に採用しようとする試みは高く評価することができます。一石二鳥の様相を呈した実用化研究ですが、システムとしての使い勝手や保守・点検、耐久性、コストメリット等を並行して検討しておかないと、開発したはいいがお蔵入りという状況を招きかねません。流通体制の確立も大きな問題です。所内評価欄に「販売の手法も今から模索の要あり」とありますが、このような評価が課されること自体に疑問を感じます。この研究は実用化研究ですので、当然のことながら、このような内容は研究の一環として行われているべきと考えます。研究員にこのような課題を課するのは酷というのであれば、センター組織を構成する幹部が汗を流すべきではないでしょうか。今回は中間報告ということですので、事後報告の際にはこの点をクリアしていただきたいと考えます。
	G委員	研究テーマ（6）を目標に、研究開発の意義を評価したい。									
	A委員	同上									
	B委員	上記のテーマも含めて木質バイオマスエネルギー応用についていろいろな可能性を検討されていることは評価できます。さらに、他エネルギーとの比較においてその優位性をもっと強調するとともに、材料の物流なども含めたシステムの提案も重要と考えます。									
	C委員	燃料は別でもボイラーを利用した消融雪システムはすでに実用化されており、あまり新しいテーマとは思われない。今後、無人方式での消融雪システムを期待したい。									
	D委員	特に低温水加温時の不完全燃焼やススの発生に注意していただきたい。また、融雪は出力の立ち上がりが重要なので、貯湯槽が必要と考える。									
	E委員	同上。燃料用ペレット、チップの確保と流通が普及のための課題ではないか。									
F委員	木質バイオマスを消融雪に適用しようとする本研究は、岩手県のオリジナリティーを前面に打ち出す研究として高く評価することができます。本実用化研究は、規模的にはスポット使用を想定しているようですが、他の熱源とのトータルコスト比較はできているのでしょうか。期待される効果として、一般家庭やトンネル出入口への普及が挙げられていますが、こちらの方の需要が高いのではないのでしょうか。いずれにしても、意義ある研究であると考えますので、事後報告の際には大いなる成果をあげられんことを期待いたします。										
G委員	委託費の比率の高さについて質問したのは、批判をするためではなく、センター研究員の置かれた優位性を明らかにするためだった。社会的及び産業的成果を期待するところである。「道の駅」に設置しての実証試験の結果が待たれるが、他委員指摘の温水暖房の方法などもその際に試みてはいかがだろうか。フレキシブルな対応を期待する。										
A委員	具体的な企業ニーズに応えたことを評価する。										
B委員	テーマの取り組み時点で「なぜWEDGを採用したのか」という他方式との比較の優劣で判るように説明がほしかった。初期段階で目的に対する方向性を誤ると遠回りすることが多い。										
C委員	今後、切削速度を早める事にも力を入れてほしい。										
D委員	今後の企業との連携に期待する。										
E委員	内燃機関の燃料噴射装置など、とても高精度な穴を要求されている。技術の差別化となるのではないか。										
F委員	WEDGによる電極小径形成・複合穴形状に対応した放電加工法・自動化のための技術開発を目的とした本微細加工技術開発は、非常に重要であると判断いたします。工作機械メーカーの技術開発とパッシングしていなければ、意義ある内容が実現できると判断いたします。しかしながら、掲げられた形状精度や加工精度、加工能率の根拠が示されなかったので、なんとも評価しがたいというのが本音です。一つのテーマである高精度小径ドリル制作は、ドリルに使用される材料と不可分な関係にあると考えます。材料技術部との連携はどうなっているのでしょうか。材料開発と連動して研究が遂行されているのであればその独自性を評価できますが、そうでないとするならば、センターのメリットを活かした研究開発テーマにはなっていないと考えます。										
G委員	製品精度や工数において岩手県内企業が比較的優位性を持つための研究が重要であることは理解できる。複合微細穴の「複合」（多段）、「微細」のいずれに重点があるから質疑応答で理解できたように思うが、その限界（深い穴）も含め、最初の発表にもり込むべきだったように感じた。										

部会	番号	事業名	テーマ名	評価段階	担当部	開始	終了	所内総合評価	外部総合評価平均	委員	コメント（原文）
	10	地域新生コンソーシアム研究開発事業	超高精度金型測定技術の構築			H15	H16	3	3.0	A委員	具体的な北上の企業ニーズに基づく開発であることを期待する。やるなら0.1人のおつきあい研究でなく、ちゃんとやるのが大事。
										B委員	他との共同開発としてのテーマの優位性は評価しますが、当センターにとっての位置付けや貢献度が不明です。所要人数0.1名でどれだけのが出来るかが疑問です。
										C委員	企業との共同研究を高く評価したい。
										D委員	今後の企業との連携に期待する。
										E委員	-
										F委員	高精度プレス加工技術を実現するためには、その基盤となる金型を高精度で測定する必要があり、3次元測定器の構成方法・誤差分離技術・温度補償技術等の確立も理解できます。是非とも目標として掲げた0.5μmオーダーの精度補償を実現していただきたいと考えます。関連分野の基盤を構築する重要な要素技術であるだけに、その成果を期待いたします。
	G委員	上記（9）と同様に、独自加工技術による優位性を狙う点は理解できる。他委員から指摘のあった<所員人数0.1人>にはやや疑問を感じた。									
	11	戦略的技術開発支援事業	ZnO単結晶基板の応用に関する研究			H15	H17	3	3.6	A委員	リーダーシップを発揮し（工技セがまも役なら）強力に進めることを期待する（F/S調査に基づく開発計画、企業・大学を含めた体制）。スピードアップと体制強化が必要（年度途中でも）。
										B委員	テーマとしての可能性は大いに評価します。今ターゲットとしている分野だけでなく、幅広い応用展開のために基礎的なデータを早い時期に取っておくことが重要だと思います。
										C委員	県内での企業化に期待したい。
										D委員	今後の岩手発のキーテクノロジーになるものとして期待。
										E委員	研究体制を評価し、岩手発の日本の重要研究とすべし。
										F委員	非常に興味ある研究テーマであると考えます。オープンラボ開設も着々と進んでいるようで、その成果が期待されます。一つ気になる点は、プレゼンでも紹介された事前調査の内容です。シンクタンクの調査は個々の内容を大括りした概観的内容となっており、往々にして実態に即していない面が多々あることが指摘されています。重要なことは、足で稼いだニーズであるか否かであると考えます。事前調査が掲げられた研究内容とマッチしているのか、夢物語だけが先行していないのか、今一度、その足元を確認しておく必要があると考えます。
	G委員	この研究の実現性を予測する知識は持ち合わせていないが、「ZnO（酸化亜鉛）ランド・岩手」となるよう期待する。									
	12	夢県土いわて戦略的研究推進事業	画像処理による土壌検査システムの開発		事前	H15	H16	3	3.0	A委員	土壌の健全性とは何か、赤色値で測れるのかについて不明であった。もっと自主性が必要。2に近い3。
										B委員	土壌の健全性を評価する特性値として、炭素含有量が妥当であるという理論的・実証的な検証の必要性を感じます。
										C委員	農業においても差別化が必要であり、期待します。
										D委員	おもしろいが、ユーザーは使ってくれないと考える。
E委員										安全でおいしい農作物を算出するためには、土が健康でなければならない。健康な土を作るためには必要だと思う。	
F委員										生産現場での使用を前提とした簡易測定キットの開発を行う場合、どのような人たちがどのような使い方をするのか、望まれている内容はそれだけなのか等々、徹底したリサーチが必要となります。成否の鍵はまさにこの点にあるといっても過言ではありません。デザイン部との連携を密にして、技術的側面と使用的側面のベストマッチングを図っていただきたいと考えます。また、土壌の品質という場合、炭素量の同定だけで済むのでしょうか。当然のことながら他のパラメーター測定に対する要求も出てくるはず。徹底したニーズ調査が必要であると判断いたします。また、本技術開発は、将来的にはイメージスキャナではなくデジタルカメラで対応することも可能と考えます。このあたりも視野に入れておいてほしいと考えます。一つ疑問があります。R値のみで炭素量を推定するとありますが、本当にそうなのか疑問に感じます。R値が同じであってもG値とB値の割合が異なっていれば、当然のことながら土壌の色や成分も異なるはず。この点がクリアされていけばよいのですが。	
G委員	土壌画像のR（赤色）成分から全炭素の含量を推定できるかどうか、説明資料と発表だけでは確信が持てない。岩手ブランドの確立に寄与するならば大変に好ましい。（社）家の光協会に関連した折、農村部のパソコン導入率は高いものの、実際の使用者は農業従事者でなかった。ユーザーの実態を調査した上でのインターフェース（伝達手段）を望む。										

部会	番号	事業名	テーマ名	評価段階	担当部	開始	終了	所内総合評価	外部総合評価平均	委員	コメント（原文）
生産技術部会 11月5日(水)	13	地域新生コンソーシアム研究開発事業（中小企業枠）	環境監視用空撮システムの開発	事前	電機	H16	H17	3	3.1	A委員	不法投棄監視に、これがベストかどうかについて疑問が残った。再検討が望まれる。2に近い3。
										B委員	不法投棄監視に留まらず、確立した技術の応用展開されることを期待します。
										C委員	他の利用法も考えられ、大いに期待したい。
										D委員	パッチ処理であれば、回収後の処理が大変で使ってくれる人はわずか。オンライン（無線）全自動処理を目指すべきと考えます。
										E委員	都市のごみ捨て場にならないようにしなければならない。他の分野にも応用可能である。
	F委員	セミオートマチック手法により高さ10cmという精度で計測できる点は高く評価することができます。しかしながら、ラジコン電波の到達距離を勘案すると、監視を目的とした本システムが果たして有効な方策であるかどうか、疑問を抱かざるを得ません。本システム開発は、不法投棄の監視に特化されていますが、単なる監視だけで不法投棄が減少するとはとても考えられません。取締りのスタートにはなるといってお話でしたが、それだけでは、技術開発それ自体が目的化されているのみで、問題解決の糸口にはなっていないと考えます。技術はあくまでも「目的を遂行するための手段」であると考えべきで、この意味で、不法投棄解消全体の中でその意義を問い直す必要があると考えます。いくら優れた技術開発がなされたとしても、それが有効に機能しなくては意味がありません。有効に利用されるか否かは、トータルな視点からの位置づけひとつにかかっていると思います。行政全体のトータルなバックアップ体制がとられない限り、無意味な開発に陥りかねません。この点、大いに危惧いたします。									
	G委員	開発の目的に、不法投棄監視、農作物監視、建築物・土地の測定の、およびその計測結果活用方法も異なる3つが挙げられている点にわずかながら疑問がある。これらは「社会システムデザイン」としては別のもののように思われるからである。									
	A委員	ニッケルアレルギーをいうなら、時計バンドの方が問題。まず、しっかりした調査が必要。									
	B委員	ステンレスに対するアレルギーレスの材質として市場展開するためには、金属アレルギーの問題の大きさを統計的に収集して、その有益性を確認する必要がある。									
	C委員	新分野にも期待したい。									
	D委員	コスト、供給量共に他のNiフリー金属に勝ち目はあるのかわかりません。									
	E委員	金属アレルギーの対策になるのではないか。岩手発の新しい素材に羽ばたく製品にしてほしい。									
	F委員	Niを取り除いたCo基合金の生体適合性に着目し、理美容銃や非磁性医療用銃を開発しようとする着想は面白いと考えます。このような開発が成功するか否かは、対象（理美容界や医療界）に対する徹底した調査が行われているかどうかを鍵と捉えていると考えます。プレゼンを聞く限り、徹底したサーベイが行われていると判断することができません。ファインセラミックスとの競合といった点も、これからは問題となってくるはずですが、また、本開発で鍵を握るのは「切れ味評価」技術であることも自明です。切れ味評価技術を物理的観点に立脚して構築するのはそれほど難しい問題ではないと考えます。問題は、人間の感覚といった定性的な評価内容を如何にして定量化するのか、また定量化できた内容を物理的パラメータと如何にして対応させるのかといった点にあると考えます。このような感覚評価は、まさにデザインの領域ですので、デザイン部との連携強化を是非ともお願いいたします。感覚評価の定量化が成否の分かれ目であると考えます。									
	G委員	ニッケルフリーの製品の需要は理解できる。ただし理美容銃といったプロユースものは保安性（慣性）が高い。計測上の重さの違いを<デザイン>で解決するというのは簡単ではなく、形状、プロポーション、バランス、重心など（事前のユーザーニーズを調査し）ユーザーテストを繰り返しての製品化を期待する。									
	A委員	せっかくつくった車椅子が何故売れないのか。PRが必要なら、徹底的にPRしてみるべき。									
B委員	とにかくも製品化されて市場に投入されていることは評価します。あとはお客様にとって魅力ある+ のコンセプトを付加して、売れる商品にすることを期待します。										
C委員	利用拡大がいまいちと思われる。										
D委員	室内用木製車いすは、大量生産でコストダウンすれば、必ず売れると考えますし、身障者のためになると考えます。										
E委員	導入した機械を他の研究にも使えるようにパーツをそろえてほしい。車いすはもっと販売のためのアピールをする必要あり。										
F委員	センター初のプロジェクト研究ということですが、本当にセンターのプロジェクト研究になっているのかわかりませんが、大いに疑問を感じます。なぜなら、商品化された対象が本当に有効であるか否かは、その対象が使用されてはじめて評価を下すことができるからです。室内用木製車椅子の納品が5台ということですが、今後の売り上げを期待することですが、このような販売を考える前に、行わなくてはならないことがあるのではないのでしょうか。それは、この車椅子が本当に有効であることを実証する場を設けていないからです。例えば、県の介護施設等に無償で設置して、その有効性が認識されれば後は口コミで広がってゆき、ひいては販売台数増加につながるのではないのでしょうか。近視眼的にものをみるのではなく、それなりの先行投資を行って、中・長期的視点でものを育て上げていく姿勢が必要不可欠であると判断いたします。センターのプロジェクト研究を標榜するからには、上層部がそのような働きかけをしていく姿勢やそのための体制構築、まさにこのことが問われていると考えます。										
G委員	室内用車いすの納入実績が5台というのは「工業化」の観点から大いに疑問がある。JISの強度試験以上に、室内（住宅、福祉施設）で使用するための機能（ストッパーなど）、デザイン（障害者用らしくない）など、ユーザー調査を実施しての改良が望まれる。類似商品にも学ぶべきだし、県としての納入サポートにも期待する。他の2点についても同様である。										

部会	番号	事業名	テーマ名	評価段階	担当部	開始	終了	所内総合 評価	外部総合 評価平均	委員	コメント（原文）
	16	特定産業集積 活性化関連機 関支援事業	金型設計等にお けるCADデータ 転送時の互換 性問題解決			H13	H14	3	3.1	A委員	今後の普及を期待。
										B委員	所内の業務効率を向上された効果は評価しますが、これをもっとさらに広く企業の問題の解決に活用するためにはさらに工夫が必要かと思 います。
										C委員	企業での成果があった事に一定の評価をします。
										D委員	より汎用化を目指すとうれいと考えます。
										E委員	コスト削減になる。
										F委員	他のテーマと比較すると華々しさはありませんが、非常に重要なテーマであると認識しています。県内企業に対する技術支援の一環として 「設備利用」ということがセンターの目的として掲げられています。CNCパイプベンダーが使えないというお話が出ておりましたが、このよ うなお話を伺うと、センターが本当に機能しているかどうか疑問を抱きます。所内評価において、新規性は低いが必要なからみて妥当とい う評価が下されていますが、それならば、なぜ評価点が4にならないのでしょうか。先端技術に目を向けて数値目標達成を目指すことはも ちろん重要なことですが、センター利用拡大につながる基盤を整備することも非常欠くべからざる処置であると考えます。県内企業の支援 には、それぞれの目線を意識したこのような地道な研究が必要不可欠と考えますので、所内管理体制の意識改革に期待いたします。
										G委員	多くの場面で多くの方が経験する問題解決を評価したい。費用対効果も高い。情報公開に当たっては、「マニュアル」など作成してはいか がらうか。
	17	ユニバーサル デザイン開発 技術普及推進 事業	地場産業製品へ のユニバーサル デザインの導入	中間	特デ	H13	H15	3	3.4	A委員	デザインはよいですが、例えば鉄瓶でいえば"重い"、"さびやすい"を改善する、商品としての総合的開発が望まれる。
										B委員	県産品に対して技術支援して企業の売上拡大に貢献していることは評価します。さらには岩手県発信のユニバーサルデザインのデファク トスタンダード的なものが生まれれば非常にすばらしい事と思えます。
										C委員	かたいイメージの職人世界に新風を吹き込むのは大事だと思いますが、今後の発展に大いに期待します。
										D委員	岩手県産品のイメージ向上に大変貢献したと考えます。期間の目に見えた効果より、これからの多方面にわたる効果は大きいと考えます。
										E委員	ユニバーサルデザインを地場産業への導入は将来的にも重要な課題である。今後とも市場拡大するような指導が必要である。
										F委員	ユニバーサルデザインは世界的な潮流となっています。経済産業省もユニバーサルデザイン懇談会を主宰し魅力あるユニバーサルデザイン 製品市場の確立が急務であることを提言しています。これを受けて様々な工業製品分野において意欲的な取り組みが開始されていますが、 伝統的工芸品の分野でユニバーサルデザインを検討しているのは、ここ岩手県だけであると認識しています。伝統的工芸品は、まさに使い 手の発想からではなく育て上げられてきた品物であるだけに、このテーマはその核心を射抜いた重要な研究であると考えます。古いものを 守り続けることだけが伝統ではありません。新しいものを創り上げるのも伝統を育む重要な施策です。岩手県のセンターが全国のセンター を主導する芽が出始めていると考えますので、今後の展開に期待いたします。
										G委員	南部鉄器を対象としたUDに最も興味をひかれる。この分野は鉄の特性を活かしたUDの実現が商品の購買に直結する分野だからだ。外部のデ ザイナーを起用してのデザイン開発も貴重である。重さやさびといった課題がある程度解決されたようだ。PR、販路開拓、ディストリ ビューション体制など、息の長い取り組みを期待する。